

## やわらかみどりなそらのした

5月の風は、匂いがするわ。

目をつむって、両手を組んで。すうつ、と息を吸い込むと、まずやってくるのは草の匂い。それから若葉と、あと

「ひかりの匂い」

「はい？」

あら？、すぐ近くから、びっくりした声？

ぱつ、と声の方に向けて目を開けたら、目の前いっぱい顔があった。飛び出しそうな目をした、三つ編みの女の子。

「え、えっと　　においますか？」

お手伝い姿のひかりさんが、エプロン持ち上げてクンクンかいでる。——いっけない！

思わず席から立ち上がろう　　としたんだけど、できなかつた。

「だーいじょうぶ。ひかりのは、ソースとシロップの匂いだよ」

テーブルの向こう側から、わたしの肩を押さえたなぎさが、わたしにむかってウィンクしてる。

「でしょ、ほのか？」

わたしがうなずいたら、ひかりさんが息をついた。ふう、助かったわ。なぎさって、ほんとによく見てるのよね。

わたしは、なぎさにちよつと目くばせした。なぎさも、わたしにだけ見えるようにちよつと手を上げて、目で返してくれる。

『ごめん、ありがとう』いって、気にしないの』うふふ。声を出すより、ことばが聞こえてくるみたい、ね。

そんなこと考えてたら、ぴよこん、ってテーブルの上になにか飛び出してきた。

「ポルンもおなじポポ　　ポルンもひかりと同じにおいポポ」

### 3 やわらかみどりなそらのした

思わずばつ、と立ち上がったら、とたんに目の前が暗くなった。なぎさも一緒に立ち上がって、テーブル隠してくれたのね。

「あんたは、ただベタベタ甘くて粉っぽいだけ。まあたひかりのジャマしてたんでしょ？」

あきれた。隠しただけじゃなくて、ぴよんぴよん跳ねてるポルンをあつという間に捕まえちゃってるわ。

なぎさはそのまま、ぶすつ、とした顔でポルンをひかりさんに渡してる。はあ、やっぱり、わたしより慣れてるな。

「あ、さつき、クレープ用の粉がかかっちゃったから ちよつと、きれいにしてあげてきます」

ひよいつ、とポルン抱えてポシエットに入れながら、ひかりさんがバンのほうに戻ってく。そのうしろ姿を見ながら、わたしたちは同時にすん、とと腰をおろした。

となりでも、スカートが一緒にふわっ、と広がる感じ。 なんだか不思議な気分ね。

\*\*\*\*\*

ひかりさんがバンに戻ってしばらく、テーブルは静かだった。

風はゆっくり流れてて、みどりとひかりの匂いがまた、ふわっ、とやってくる。

「ほのか、さつきなにぼくとしてたのよ」

風といっしょに、なぎさの声もふわっ、とやってくる。わたしの口から、自然に言葉がこぼれ出ちゃった。

「うん。ちよつと、旗のこと考えてて」

そこまで言って、しまった！ って思ったけど、遅かったわ。

顔を上げたら、なぎさがむすつ、とした顔でわたしを見るんだもの。

「え、あ、えつと」

なんて言おうか迷ってる間、なぎさはわたしの顔をじーっと見てた。けど。

「はあ。かなわないなあ、ほのかにはさ」  
うつむいて、ため息ひとつ。そのまま、目だけでわたしの顔を見上げてる。

ちえつ、って声が聞こえてきそうなの、なぎさの顔。それを見ながら、わたしは昨日の電話を思い出した。そうよ。ほんとだったから、今日は図書館に行くつもりだったのだから。相談があるから、ってここに呼び出したのは、なぎさじゃない。それなのに、テーブルに座ったつきりなんにも言わないから、つい目をつむって、余計なこと考えちゃったのよ。

「それで？なぎさの相談って、やっぱり」  
机から上げた顔が、ほんのり赤い。いつもと違うなぎさだわ。

そうよね。そもそも、着てる服からして、いつものなぎさじゃないんだもの。上はちよつとフリルっぽいブラウスに、薄い草色のカーディガン。下は「そんなに见なくても、わかってるって」

ああ、またむくれちゃった。世話が焼けるわねえ。

「だれも、なんにも言っていないでしょ？」

言っただけなら、ちゃんと言っわ。似合ってるわよ、ピンクのフレアスカート」

「言わないでって！仕方ないでしょ、お母さんがみんな洗濯しちゃうって、これしかないんだからっ!!」

キーン

あ、痛たたた。ちよつとは覚悟してたけど、きたわね、これは。

もう、そんなに恥ずかしがるくらいなら、最初から用件だけ言えばいいのに。

「じゃ、もう言わないから。相談はなあに？」

耳を軽くたたきながら、にっこり笑って応えてあげる。なぎさの顔が真っ赤になるまで3秒。これって、ちよつとした記録ね♡

「いや　だから　ええい、もう！　そうよ。旗だよ。旗っつ!!」

はいはい。やっと言ってくれたわ。もう、どれだ

5 やわらかみどりなそらのした

けかかっていると思っているのかしらね。

旗。いま、わたしたちが『旗』って言ったら、ひとつしかないわ。もちろん、この前作ったあの旗のことよね。

「あ、藤村先輩の応援の旗、ですね？」

ばつ、とふたりして顔を上げたところに、またひかりさんがいた。お水の入ったコップをおぼんにのせたまま、にっこり笑ってわたしたちを見つめてる。

最悪のタイミングだわ。早く耳をふさがなきゃ

「だ〜っつ！！ ひかり！ そんな大きな声で言わないでよっ！！」

ああ、間に合わなかった。頭がくらくらする。

「ご、ごめんさい」

わたしは思わず、ひかりさんを睨にらんじやいそうになつたけど、なんとかおさえたわ。別に、彼女が悪いわけじゃないんだものね。

それじゃ、ひとつ息すって よし。

「な・ぎ・さ？」

ん、もあ。ひかりさんに当たらないで。なぎさの問題でしょ、これは？」

あゝあ、言ったとたんに、むくれちゃってる。困ったわねえ。

「ん〜 そつ、なんだけど、さあ」

そんな訴えるような目で見ないでよ。となりで、ひかりさんも困った顔してるし。もう、子犬にかまれてるみたいじゃない。

「とにかく、座って。ひかりさんも、忙しくなかつたら座ってくれる？」

ひかりさんのおぼんを手からはがしながら、わたしは素早くふたりに視線を送った。

それだけで、ふたりともおとなしく座っちゃう。ちよつと複雑な気分だわ。わたしの目つきって、この1年でそんなに悪くなっちゃったのかしら？

「え、えーと ほのか？」

ああ、いけない。目の前でふたりとも、わたしの顔色うかがってる。それじゃ、またひとつ息すって、と。

「さ、なぎさ。相談をどうぞ？ 旗が、どうかしたの？」

「できるだけ、にっこり笑ったつもりなだけで。なぎさは目をそらして、わたし見てくれないわね。」

「あ、ん、とね、そのほのか、預かってくれないかな、って。」

顔を両手でつかんで、無理でもこつち向かせようかしら？ っと思つた瞬間、やっと消えそうな声が聞こえてきたわ。

「預かるって？」

「だから、旗を、さ。」

旗。藤村くんのサッカー試合を応援するために、なぎさが作った旗。たったひとりのために、誰の手も借りずに、ひとりで作った旗——はあ。

思わずため息ついちゃったじゃない。まったく、なぎささったら

「な、なんか、家に置いてくと、見つかつちやいそつで。」

また真つ赤になった顔見てたら、もう苦笑いしか出てこないわ。

「見つかつちや、いけないんですか？」

横からひかりさんも、けっこう追い詰めてる。彼女の場合、全然そのつもりがない、っていうのが怖いところよね。

「おかあさんに見つかったら、なに言われるかわからないよあ。」

ふう。

もひとつため息ついてから、なぎさの顔見たら、ちよつとだけ口元が笑ってきちゃう。うん

「ん、きつと、喜んでくれると思っけどな♡」

「それがイヤなのっ!!」  
ひかりさんが、きよとんとした目でわたしたちを見てるのわかるわ。

それじゃ、もつちよつとノつちやいましようか

「賢沢ねえ。それじゃ」

あ、そつだ 藤村くんにあげたらどう？ おかあ

7 やわらかみどりなそらのした

さんよりもっと喜 むべっ!?!」

「ぶっよ。ほのか」

口をきゅつとぶざがれて、せぎ込んだ。ちよつと、イタズラしすぎちゃったかしら?」

そう思いながら、なぎさの方を見て 思わず、息が止まった。さっきの声にこの目。なぎさ、本気だわ。

でも、ほんとよ、なぎさ。きつと、ほかの誰よりずっと喜んでくれるわ。」

あの旗とあなたが、あのとときの力のみなもとだっただもの

「 やっぱり、イヤ」

「あゝ、やっぱダメかあ」

なぎさの音が、ちよつと遠くに聞こえる。

そつ、きつともつすぐ。なぎさが、もうほなのちよつとだけ勇気を出せば

「ダメじゃなくて、イヤ」

「ほのか?」

バシャッ!

「ちよ、ちよつとほのか!? なにやってんのよ。いきなり水ぶちまけたりして」

「だ、大丈夫ですか、ほのかさん? いま、タオルを」

ふたりの言葉ではっとした。自分に向かって倒しちゃったコップ、わたしはじつと見つめ続けてるわ。

それに それにわたし、いま口に出しちゃったかも。言葉にしちゃったかも——!?!

「え、ええ、へいきよ、平気! 驚かしちゃって、ごめんなさい。ちよつと、水のみ場で顔洗ってくるわ」

思いつきり早口でしゃべって、そのままわたしは駆け出した。小さくなってくパラソルをチラチラ見ながら、公園の端まで。

コップ持ったままなのに気づいたのは、水のみ場についてからだった。

\*\*\*\*\*

ほのかがコップ持ったまま走っていつちゃって、ひかりも雑巾取りに車にもどっちゃって。気がついたらあたし、テーブルにひとりになってた。

風で、すそがパタパタしてる。チヨシくるうんだよねえ、やっぱ、このひらひらスカートってのがさ。そりゃ、あたしだって女の子だし。絶対イヤってわけじゃないけど

イヤ、か

あたしの目が、勝手に公園の隅に行っちゃってる。水のみ場のあるところ。ほのかが走ってった場所。

今朝会ったときから、ちよつとヘンだったんだよね。てつきり、あたしの服見て顔ひきつらせてるんだと思ってたんだけど。

イヤ、ねえ

喜んで預かってくれる、なんて思ってなかったし、怒るかな、とかも考えてはいたんだけど。それなら『ダメ』だよ

「あ、そこも拭きますね」

声におもわずビクツとして振り返っちゃったよ。その先で、雑巾もったひかりが、きよとん、としている。いつの間に来たんだろ。全然気づかなかった。

「あの」

しまった、驚かせちゃったか　と思ったら、違う。ちよつと曇った顔で、あたしの目、じつと覗き込んでる？

「行かなくて、いいんですか？」

あ、そっか。

「ああ。うん、いいんじゃない？」

手を振って答えたら、ひかり、手を口元に持ってきながら、少しだけおでこにシワ作って、

「なんか、意外です」

「そお？」

9 やわらかみどりなそらのした

自分じゃ気がついてないみたい。手になに持ってるのか。しばらく、黙ってよ。

「ええ。きょうのなきささん、ちょっと意外旗のことも。」

私も、ほのかさんに賛成なんです。応援してくれた旗をもらえるなんて、とても嬉しいことじゃうぷっ！」

ひかりの腕をコツン、ってつついたら、雑巾に顔が埋まった。やっぱり、持っているもの忘れてたな、ひかり。

あ、あはは。腕で顔ふいたあとの目が、なんかジトつとしてるよ。ふう、しかたないか。

「このままでいい、なんて思っていないよ。けどさ」顔が熱くなってるの、自分でもわかるなあ。けど、相手がひかりだと、なんか言ってもいいような気がするんだよね。

「怖いんだよねえ。あたし、臆病だからさ」  
なんか、安心なんだなあ。ひかりは怒るかもしれ

ないけど、言っても、わからないんじゃないかな、なんて思えちゃうから。ほのか相手じゃ、うっかりひと言こぼしただけで、全部ばれちゃうんだもん。

ほのかも、実はそうなのかも。あたしには言えないこと、やっぱりあるのかもね。

「たったひとこと言えればいいだけなんだけどね。それで変わっちゃうから。それが怖」

そこまで言っ、あつ、と思った。

ほのかがあたしに言えないこと、言ったら変わっちゃうこと。

イヤ、か!!

「それかあ！　　つたくつ!!」

こぶしを握った瞬間、びくつとした空気が流れてきた。顔を上げたら、おびえてるみたいなの、ひかりのまんまるな目。

あつちゃあ、ついやつちゃったよ。ひかりも結構ためこむ方だし、気をつけてやんなきゃ、って思っ



てたのになあ。あたしたちの方が、いろんな意味で先輩なんだから。一年前の気持ちを思い出して、とん？ ちよつと待ってよ？ 一年前のあたしたちと同じ、ってことは

「ちよつと来て、ひかり」

ばつとひかりの手をつかんで、あたしは車の方に走った。

ずるずる引きずってる感じが、手に伝わって来る。ちらつ、と遠くの水の現場を見てみたけど、ほのかはまだ動いてないな。 うん。

よおし。全部まとめて、片付けてみよっか

\*\*\*\*\*

「それじゃ、ひかり借りますねー」

私の肩をがっちりかかえて、なぎささんが言った。バンの中では、あかねさんがここにこしながら手を振ってるわ。

なんで、こんなことになっちゃったんだろう？ 今日は変なことばかり。いつもしっかりしてるはずのほのかさんは、コップ倒しちゃうし。なぎささんは、怖いなんて言ってたかと思つたら、いきなり私をバンに引つ張ってくし

やつぱり、ふたりとも疲れてるのかしら。大事な応援のときも、旅行先でさえ戦わなきゃいけないし。

この前、なぎささんは私に、『自分のことだけ考えて』って言うてくれたけど、それでふたりが疲れちゃったんじゃない

「 あり、ひかり!？」

声にびつくりして顔を上げたら、すぐそばに大きななにかがあった。

「ちよつと、大丈夫？ ぼーっとし ぶっ！」

あ、いつけない！ 思わず、両手で押し返したの、なぎささんの顔だわ!!

「くへっ！ べっ、べっ！」

ああ、どうしよう。なぎささん、顔を手でこすり

ながら、せきこんでる！

「ふう。ごめん、ひかり。いきなりだもんね。おどかしちゃった？」

あああ、またやつちゃったわ。とにかく頭を下げ

ようとしたら、両方の肩がぐい、っと持ち上がった。「あやまないの。ぼーっとすることくらい、誰にだってあんだから。ちよっと、ほのか呼んでくるからさ、ここで待っててよ。ね？」

走ってくなぎささんの後姿を見ながら、やつぱり私は思っちゃった。

私ってやつぱり、ふたりのお荷物なんだなあ、って。

\*\*\*\*\*

水のみ場の蛇口から、水が流れてく。

わたしは、それをじっと見た。

上に向けた蛇口から、ちよっとだけ盛り上がった水が、きらきら輝きながら落ちてゆく。まるで透明

なガラス細工みたい

でも、ちよっと風が吹くと、形が変わっちゃう。

ほんのちよっとのことで、変わっちゃう

「ほのか？」

ふりむいたとこに、きよとん、とした顔が立ってた。

「あ なぎさ」

「あ じゃないわよ。いつまでたっても戻ってこないんだもん。そんなに顔洗ってたら、肌はげちゃうよ」

ちよっとだけ目をつむって、ふう、ってひとつ息はいて。それからわたしは、にっこり笑ってみた。

「十代前半の皮膚はね、洗ったくらいじゃ」

「はいはいはい！もう、そついうこと言えるようなら、だいじよぶだよね？」

言いかけたとたん、目の前になぎさの手。もつ、しょうがないわね。

「うん」

あきらめて、ちよっとだけうなずいたら、今度は

なぎさが、音立てて息をすった。

今はそれだけで、びくつ、としちゃっわ。

「ところでさ、ほのか あれ、どう思う？」

身構えてるわたしとは全然違う場所を、なぎさが指さした。その先には、パラソルの下にこしかけた女の子。

「あれ、って ひかりさん？」

わたしのことじゃない、って思ったら、ちょっと気が抜けちゃった。

でもその分、変なのがよくわかるわ。土曜のお昼前で、パンの方にはひとが集まりはじめてるのに、なんであんなところで あら？ それだけじゃないわ。遠くからでもわかる。なんだか表情が、雰囲気、違う？

「ね？」

わたしはなぎさの目を見て、大きくうなずいた。

そう、ひかりさん、確かに変よ。

牧場で新メニュー作って、元気に働いてたときの

雰囲気じゃないわ。それに、さっきわたし達と一緒に

にいたときも違う雰囲気。それってつまり！

「だもんでさ。あたし、ちよつとあかね先輩んどこ行って、ひかり借りてきたんだけど」

借りてきたあ！！

目の前で、音がするぐらいうなずいてる。自信たっぷりなのなぎさの表情、かえって不安だわ。

「で、なんて言ってきたの？」

「ん？ だから、ひかり貸して、って」

ほあら、これだもの！

思わず目だけで空を仰いじやった。いっしょに、ため息まで出てきちゃっわ。けど、まあ言っちゃったことはしかたないわね。

「それで、どうするつもり？」

目をなぎさに戻して、できるだけゆっくり訊いてみたら、なぎさの声がちよつと小さくなった。

「ん。それなんだけど」

ほのか。ちよつとき、散歩に行かない？」

え？

「ほら、去年の夏に行ったじゃん。あの坂の上。そこでさ。」

なぎさの計画を聞いて、わたしは心の中でうなずいたわ。きつと、それでわかってくれる、ってわたしも思う。でも

\*\*\*\*\*

「でもなぎさ、せつかくのフレアスカートが。」

一瞬あたしは、ぽかーんとしちゃった。変なこと気にするなあ、って。

「いいから、いいから。」

だから、手をとってそのまま引っ張ってこうとしたんだけど、

「いいから、じゃないわ。きれいなスカート、汚れちゃったらもったいないわよ？」

両手をにぎって、あたしに抗議してる。

はい

はい。どーせあたしはほのかみたいに、服にこだわらませんよーだ。

「いいって。どうせこんなの、あたしになんか似合うモンじゃない。」

「そんなことないっ!!」

び、びっくりしたあ。いきなりすごい大声出すんだもん。

見たらほのかの目がマジだよ。両手をぎゅっと握りしめて、上目づかいでじろつとにらみつけてきてる。な、なんで??

「ちよつとこつち!」

ぱつ、とあたしの後ろに回ったかと思ったら、背中ぐいぐい押ししてきた。

力はたいしたことないんだけど、なんか逆らえない感じでそのまま押されて真っ直ぐ。って、池?

水のみ場のすぐ近くにある池。その周りの柵にあたり押し付けたかとおもったら、そのままぐいって上半身曲げさせられちゃった。

「さあ、見て。池に映ってるのは、だあれ？」

真下から、ほのかと一緒に見上げてる人。そりゃもちろん、

「あ、あたし　だよ。うん」

「そう！　美墨なぎささん。私が自慢できる、いちばん魅力的な友だちよ♡」

う、うわぁ　そうだよ、今日はこのモードなんだった、ほのかは。

「だから、その姿で」

あたしのからだを起き上がらせて、真っ直ぐ見つけてきた瞬間、ヤバい！　って思った。このモードで次に来る言葉なんて、決まってるよ！

「ストロップ！　また、そっちに話もってくんだから！　それ以上言ったら、しばらく口きいたげないよ？」

あゝあ、口とがらせちゃって。あたしのこと、しょうがないな、って目で見てるよ。　わざと、ね。

そのちよっと前にどんな表情してたか、なんて、自

分じゃ気付いてないんだろうなあ。

「なにか言った？」

「べつに？」

それより、さっきの打ち合わせどおり、ちゃんとやってよ？」

疑ってる顔のまま、ほのかがうなずいた。うん。そっちの心配なんか、あたしはしてないよ。

ったく　みてなよ、ほのか。

ダテに一年半もつきあってないんだからね！

\*\*\*\*\*

「ここ、ですか？」

「うん。遊歩道」

右どなりをチラツと見ながら言ったら、なぎささんが腰に手をあててうなずいてた。

森の中にある細い道。先のほうは、森に隠れちゃって、よくわからないくらい。

なぎささん、水のみ場からほのかさん連れて戻ってきたと思ったら、そのまま私を引つ張って、トコトコ歩いて行っちゃうんだもの。それで、どこに行くのかなあ、って思いながらついて行ったら、ただ公園をまわっただけ。

いつものポシエットは、タコカフェのそばで、ミッブルたちといっしょ。おながが軽すぎて、ヘンな感じ。でも

「うわあ」

私は、ちよつと言葉にならなかつた。遊歩道なんて思えないくらい、急な坂道。ちよつと先を見るだけで、輝いてたお日さまが、隠れちゃってるわ。

いつもの公園に、こんなところがあったなんて

「古い道を、そのまま舗装しちゃったみたいね。ずっと昔は、ただの山道だったのよ」

ほのかさんが、私の左どなりにやってきて、肩をちよつとたたいた。

ふしぎ。それだけなのに、急な坂へ向かってすっつ、

と足が出て行くわ。

「って、ほのかのおばあちゃんの受け売りなんだけどね。　　つとつ!?」

なぎささんが、私の前に出ようとしてつんのめっちゃった。なんとか、転ばないで済んだみたいだけれど。

「ああっ、もう！　なんでこう足にまとわりつくんだろね、これ!!」

なぎささん、足をバタバタさせてるわ。でもふわふわしたスカートが、足に合わせてひらひら絡まっちゃってる。なんだか、とつても歩きにくそう。

「なぎさの歩き方がいけないのよ。もうちよつと、太ももから動くようにしなくちゃ」

ほのかさんの声が、私の頭を越えていった。とたんに、なぎささんがむーっとしちやっつて、

「　　めんどういよあ。これ。やっぱ、あたしになんか向いて　　」

「な・ぎ・さ?」

怖い声に、思わず足が止まりそうになっちゃったけど、背中を押されてわたしはまた歩き出した。左どなりからは寒気がして、そっちに向けないくらい。「はいはい。わかったよ、もう。なんでも練習でしよ？」

右どなりから、やれやれ、って声。

「そうよ。いつか、デートのとき、足が引つかかったらみつともないでしょ？」

「そんなんで嫌いになるひとなら、あたしのほつから願ひ下げだよ！」

左からくすくす、って笑い声が聞こえてきた。でも、なんだかいつもと違うわ。まさか

「そうねえ。たしかにあの人は、そんなことじゃ嫌いにならないわ。よかったわね」

やっぱり。ほのかさん、からかいすぎだわ。もう、今は私にだってわかるもの。この話になると、なぎささんがどう反応するか、って。

「こ　んのおっ……！」

ああ、なんか変な雰囲気。

いけない。私が、なんとかなごませなくちゃ。

「こ、この坂って、先になにかあるんですか？」  
ふたりして、こつち向いてくれた。うん。これだつたら

「あかねさんから、なにも聞いてないの？」

「先輩だつたら、止めるだけだよ。でしょ？」

あわわ。またなんだか　いいえ、私がかんばれば！

「あ、えっと　いえ。あぶないから、あまり奥に行つちやだめだ、って言ってます」

右と左に首を振りながら、できるだけ笑顔にして。

でも、ふたりの視線が、私に来てないわ。頭の上を通つちやつてるみたい。

「ほあら、みなよ。あたしの勝つちい」

「そんなの、ただのカンでしょ？」

あああ　また、また!?

「ちがつって。ほのかだけが何でもわかる、なんて

うぬぼれれちゃだゝめ」

「なんですってえっ!!」

ふたりしてけんかしながら、急になつて坂を、走るみたいに登つてくわ。私は真中にはさまれて、一緒に走らされて　もう、息が、続かない　っ！

ぱら　ぱらぱらぱら

はあ　雨ま、で降り始め、ちゃって、っ！

「ほおら。ほのかがぶつぶつ言つから、天気だつておかしくなつちやつた」

「関係ないでしょ？それにこれ、『狐の嫁入り』よ。すぐやむわ」

ああ、もう、目も開けていられないわ。

ふたりがこんなになつても、なにもできないわ。

やっぱりだめなんだ、私じゃ。やっぱりお荷物なんだ、私は。

なら、それならいったい、どうしたらいいの!?! 私  
は、私は、ふたりに一緒にいて欲しい　っ！

「ほらっ!!」

いきなり背中をぐいつ、と押されて、転びそうになるのを踏みとどまりながら、私はぱつと目を開けた。

え？

目の前は、空。

ちよつと下の方に、街がちつちやく見えてる。

「うわぁ　」

それに、それに

「虹　?」

すごいわ。まるで、街に取っ手をつけたみたい。こんなに大きな虹なんて、初めて

「いまがどんなに苦しくても　」

なに？

背中から声。ほのかさん??

「希望さえ失わなければ　」

こんどは、なぎささんの声。



いままでけんかしてた人の声じゃないわ。とつても澄んでる、ふたつの声。

「明日はきつと、いい日になる!!」

そのふたつが、重なった。

とたんに目の前の虹が、私のなかに飛び込んだ気がしたわ。

希望さえ、失わなければ

「希望、あった?」

いままであんなに苦しかったのに、声だけでこんなに、心が澄んでゆく

ふらふらしながら振り向いた私を、ふたつの笑顔が迎えてくれた。

そっか。けんかなんか、最初からしてなかったんだわ。

私を、ここへ連れてくるために。このすごい虹を、苦しみの先に見せてくれるために。

なぎささんと、ほのかさん。ふたつを改めて見つ

めてから、私はすっかりうなずいた。

「ええ、ありました。希望」

そうよ。私の希望。絶対に信じていいもの。それは、私の目の前にあるんだもの。

「あなたはもうちょっと、言いたいこと言いなよ? あたしたちなんて、ぜんぜん完璧なんかじゃないんだから、ね?」

そう言いながら、コツン、っと叩かれた頭が、なんだかとてもきれいな音で鳴った気がした。

そう、虹と同じくらい、きれいな音

\*\*\*\*\*

「ひかり、ずっと見てるね」

なぎさの声に、ちょっと顔を上げてみた。

丘の上、けやきの木の下で一緒に腰かけてるなぎさは、崖の方をじっと見つめてる。

わたしも、今まで読んでいた本をスカートのポケットに入れて、同じものを見た。

その先には、虹をまっすぐ見つめた女の子。ときどき軽く吹いてくる風に、長いみつあみがゆらゆら揺れてるわ。

「もうちょっと待ちましょ。きつと、すぐに元気になるわ」

わたしがそう言つて、目をちらつ、と見たら、なぎさはニカッと笑い返して、

「当然！ タコカフェ特製の0円スマイルだもんね。これで復活してくんなぎや、先輩に怒られちゃうよ」

ですつて。やつぱり、あかねさんに頼まれてたのね。それじゃ、持ってきた飲み物で、作戦成功の乾杯でもしようかな。なぎさの腰につるしてある、あかねさんに持たせてもらった水筒を取つて と。

「 つっ！ いたたたっ！ 」

え？ えっ？ 水筒引つ張つただけなのに、いきなり、なぎさが痛がりだした!? スカート持ち

上げて、バサバサやってる。いつたい、なに??

「ああ、ごめんごめん。平気 じゃないけどね。スカート絡まったまま走つたから、ももが入れちゃつてさあ」

あ、ああ、そっか。びっくりした。それにしてもふふ。これも、なぎさらしい、つていうのかな。

「なにことも、経験よ。一度経験すれば、そのうち慣れるでしょ? 」

うふふ。なんだか渋い顔してるわ。でも、これはほんとよ。

「 それにしても、ひかりは運がいいよねえ。ここにきたと勝手に虹が出てくるんだもん。」

あゝあ、あたしもだれかと一緒に来たいなあ」

ころん、つて、けやきの木に寄りかかっちゃつて。ほんとに、しかたないわねえ。

気づいてよ。一步、足を踏み出しさえすればいいだけだ、つて。それだけで、なぎさはなんでもできるんだから

「ねえ、なぎさ。やっぱりわたし 旗はなぎさが  
持っているべきだと思うな」

考えながらなぎさの顔を見ていたら、自然と言葉  
が流れていった。一瞬、自分が言ったなんて気づか  
なかつたくらい。

だからなのかな。なぎさも自然にうなずいてくれ  
たわ。

「うん。どんなに恥ずかしくても、なにからかわれ  
ても、それが、なぎさの気持ちなんだから」

そう、それがなぎさのきもち。これだけは、絶対  
だれにもかえられないもの。

わたしにだって。絶対。

そんななぎさを見ると、なんだかまた、未来が  
見えてくるみたい。

そう、きつとやってくる、未来。

もし、もしも、なぎさが藤村くんときあい始  
めたら、どうなるのかしら？

やっぱり、いまと同じじゃいられないわよね？ま

た、ひとり って、なに考えてるのよ、ほのか。  
あたりまえのことじゃない。

「 ちゃえばいいのに」

え？

ええっ!?

なに、いまの？

「ん？なに？」

わたし、いまなにを言ったの？

「ちよつと、ほのか？」

なぎさが、なぎさが ちゃえば、ですって!?

まさか、そんな やだ そんなの、わたし、な

んてこと なんてことを!!

「どしたの？ 顔、青いよ。ほの」

目の前に、ぱつと出てきた手。なぎさの手 な

ぎさ！

「いやあああつっ!!」

いや。いやーいやっ!!

「なに!? ほのか、どうしたの!？」

お願い、なぎさ! わたしを見ないで!!

「ほ、ほのか、ほのか! ほのかっ!!」

ばっ!

「むっ!?!」

いきなり、目の前が暗くなった。

「むっ!?!むっ!?!」

頭がぎゅっと締めつけられて、やわらかいなかに顔が埋まって

「むむむ!?!むっ!?!」

だんだん 息が、苦しくなって

「」

「うわあ! いけない、やりすぎたっ!」

ほ、ほのか、だいじよぶ!?!」

息がらくになったと思ったら、わたしの背中に手が回ってきた。

「ちよっとは、落ち着いた?」

すこし固いなぎさの手が、背中をそっとなでてくれている。

目の前は、まだ暗い。暗くて、音がする。とくん、とくん、って なぎさの、胸だったんだわ。

「さっき、ほのか言ったよね。あたしがさ、振られればいい、って」

ひっ!

ばっ、と離れようとしたら、なぎさの手がわたしの頭を胸に押し付けた。

「逃げなくなったっていいって。わかってたよ。どっちかっていうと、ひかりに教えられちゃったけどね」

なんとか逃げようとして、頭を動かしてたところで、わたしははっとした。

「どっちかっていうと、安心したよ。変わることで、やっぱり、ほのかでも怖いんだなあ、ってさ」

ウソじゃない。わたしを安心させるためじゃないわ、なぎさの言葉。だって、やわらかい胸からの音

さっきと変わってないんだもの。

「でも、あたしは信じてる。自分も、ほのかも信じてるよ。いまと同じじゃなくなっただって、どんなに変わっただって、あたしたちは友だちだっただけ」

じつと聞いてたら、だんだん胸の音が早くなってきた。

ふふ。なんだか不思議。わたし、笑えるんだわ。さつきは、みんなおしまいみたいに思えたのに。

「ほ、ほら、見てみなよ。けやきの葉っぱにつゆがついてきれいだから。えーっと やわらかみどり色！」

わたしの肩を持ち上げてくれたから、わたしはそのまま、けやきにもたれかかった。やわらかみどりですって。なぎさらしい、けど。

「それを言うなら、ソフトグリーンよ」

これが、わたしらしさよね。でしょ？

そう思いながら見上げたら、木漏れ日が目に入った。

ああ、でもこのひかり、緑色で、やわらかくって

「やわらか みどり」

「でしょ？ ソフトグリーンなんて気取ったんじゃないよ。やわらかみどり。うん」

ん。いつつもそうだね。なぎさは、わたしが気がつかない、ほんとの名前を知ってるんだわ。

やわらかみどり。それを眺めていたら、なんだか眠くなって

\*\*\*\*\*

虹が、ゆつくりと薄くなってきたわ。もう、町の取っ手じゃなくて、薄いリボンみたい。

うん。なんだか、やってみたくて色々わいてきてる。ふたりにお礼言っただけ、早く帰らなくちゃ。

「なぎささん、お待たせ」

って言いながら振り向いたら、なぎささんが口を指あててた。

「しーっ」 「こいつのこと、あんまないんだから、ね」

そう言うなぎささんの肩に、ほのかさんがもたれ

てるわ。

なぎささんの言う通りね。ほのかさんのこんな寝顔、始めて見る。ほんとに、安心、って寝顔。

きつと、私のそばじゃこんな顔できないんだわ。

「なぎさ」

うふふ。ほのかさんったら、寝言でもなぎささん呼んでる。なんだか、かわいい

「なぎさ、藤村くんと ああ、そんなこと」

ほのかさん、頭をゆらしながら、ちっちゃな声で言うてる。けど、そんなこと って??

「ちよ、ちよっとほのか！ なんの夢見てんの む

ぐぐっ!?!」

「しーっ！」

静かに、って言ったの、なぎささんじゃないですか！  
とっさになぎささんの口を押さえたら、しまった、って  
いう目でわたしを見てる。あわてんぼっなんだな。

「あー、いや、そりゃそうんだけどさ ああっ、

もっっ！ ひかり、ほのかとツルんでんじゃないで

しようね!?!」

ツルむ?? って、なにかしら?!

首をかしげていたら、なぎささん、片手で頭をかかえはじめちゃった。

「わかつてるよ。ええ、ええ、そりゃあんたたちが

ツルんでいたずらなんて思わないけど あーっ！  
よけいに始末が悪いっっ!!」

小さな声でぶつぶつ言うてるなぎささんを見てたら、思わずすすす笑いがこぼれてきちゃった。

ああ、なんて簡単で、すてきな希望なんだろう。

こんなに手足動かしてるなぎささんなのに、ほのかさんがいる肩だけは全然動かないだなんて――

私もいつかきつと、できるようになるわ。

ね、先輩がた♡